

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 一般-83

学校名・団体名	たつの市立新宮小学校
HPアドレス	http://shingusyo.tatsuno.ed.jp
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	人も自然も笑顔の楽園計画 ～僕らが過去と未来を結ぶ～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>6年間の環境体験学習の集大成として、子どもたちが主体的に発案した「自然環境復元と保全に関する活動」や「自然環境に親しむ活動」に取り組み、キャリア形成に必要な人や社会とかかわる力の育成や、人と自然とが共生することの大切さを実感させる。</p>	

1. 学習の流れ

学習の期間 (平成27年4月~平成28年2月まで)

第一次：学習の見通しを立てよう (4月から7月)

- 5年生までの環境学習をふり返り、6年生としてのテーマを決定する。
(テーマ：学校を、まちを、人も自然も笑顔になる場所にしよう)
- 校内に活動の拠点・シンボルとなる場所を探す。(校舎西側の草木ゴミ置き場周辺の調査)
(草刈りとゴミ拾いの過程でゴミ置き場が27年前の卒業制作だと分かる。復元作業への思いを抱く)
- 個人企画を分類、整理、焦点化し、「自然環境復元と保全に関する活動」と「自然環境に親しむ活動」の見通しを立てる。
(復元・保全：学校の責任者である校長先生へのプレゼンによる説明の実施。企画の許可をもらう。)
(親しむ活動：揖保川いかだ下りへの参加、国指定新宮宮内遺跡での土器展など。)

第二次：見通しを立てた「みんなの企画」を実現しよう 7月から11月 (夏休み期間を含む)

- 荒廃した平成元年のひょうたん型庭園 (卒業制作) を復元・改善する。
(27年前、中心的に作業されたPTA会長への聞き取りやアルバム写真から、当時の様子を知る。)
- 希少種の生き物や絶滅危惧植物が育ちやすいようにビオトープをつくる。
(アキアカネの産卵やホタルの住みやすい環境づくりをする。在来種について学ぶ。)
(県立大学附属高校と連携し、絶滅危惧植物の「ヒシモドキ」や「ムラサキ」の保護活動をする。)
- 間伐材で、看板、簡易遊具、ベンチ、あずまやを製作する。
(市の森林組合からいただいた新宮町産の間伐材「ヒノキ」を利用し、地域のあずまやづくりの専門家の指導のもと、簡易遊具、ベンチ、そしてあずまやを製作し、設置する。)
- 泥釜で土器をつくり、展示する。
(市教委文化財課の指導のもと、泥釜で土器を焼き、「いこいの広場」と遺跡の竪穴住居で展示会を開く。)
- 市環境課や西播磨県民局より、草木ゴミの処分の仕方や林業の課題を学ぶ。
- 揖保川いかだ下り大会に参加し、自然のおもしろさを実感する。

第三次：発展的な復元をした「いこいの広場」に招待しよう 10月

- 下級生や来年度入学予定の子ども園の小さな子を招待し、自然の楽しさを伝える。
- 27年前に庭園を製作された当時の方を招待し、発展的復元の様子を伝える。

第四次：活動をふり返り、身についた力について整理しよう 11月、2月

- 活動を通して、身についた力を整理・分析する。(11月)
- 絶滅危惧植物の保全活動を5年生に引き継ぐ。(2月)

2. 子どもたちの学習意欲を維持するための工夫



子どもたちが主体的に学ぶためには、学習意欲の高まりが不可欠である。そこで必要となるのが、学習に対する課題意識を持たせ方である。本単元では、校舎敷地西側にある「草木ゴミ置き場」(左写真)を人と自然とが共生できる「いこいの広場」に変えようとしたことで分かった2つの事実によって、課題意識が高まった。その事実とは、一つが、草木ゴミ置き場だと思っていた所が27年前の卒業記念品「ひょうたん型庭園」だったこと、もう一つが、草木ゴミを撤去するには自分たちの力では難しいということであった。特に一つ目の事実は子どもたちにとって衝撃だった。当時の作成に携わった地域の方の思いを受け、何としても復元しないとイケないという気持ちになっていた。

3. 課題のクリアには、主体的な議論が不可欠

草木ゴミ置き場を「いこいの広場」へと復元・改良する企画については、まず個人企画を募り、それを小グループ、学年全体でブラッシュアップする場を広げつつ、具体的な企画へと練り上げた。

企画の完成および校長先生への許諾もとれ、いよいよ製作作業に入るのであるが、最大の課題は費用の問題であった。草木ゴミの撤去費用、あずまや建設費用を合わせると、子どもたちの予算計画をはるかに越えていた。現実を知り、どうするか話し合う子どもたち。この主体的な議論が、次の活動へとつながった。業者をお願いする草木ゴミの撤去作業を意欲的に手伝ったり、森林組合をお願いして、広場に使用するヒノキの間伐材をいただいたりした。主体的な議論によって、いっそう子どもたちの意欲が高まった証である。

4. 主な活動内容

個人企画から3ヶ月後の夏休み、ようやくあずまや建設とビオトープづくりが始まった。企画から製作作業開始まで、自分たちの力でたどり着けた子どもたち。そのため夏休みでも意欲的に参加し、作業することができた。誌面の都合上、上記以外の主な活動内容を、「自然環境復元と保全に関する活動」と「自然環境に親しむ活動」に分けて整理したい。

『自然環境復元と保全に関する活動』



【あずまやづくり】

【ホタルの幼虫放流】

【園児との自然の遊び会】

【ヒシモドキの移植作業】

- 校舎西側にあるタッチプール周辺の草木ゴミ置き場を、人と自然とが共生できる「いこいの場」（絶滅危惧植物保護用ビオトープ、あずまやの建築、簡易遊具等）として整備した。
- 隣接するこども園の園児を「いこいの広場」に招待し、自然の遊び会を行った。
- 高校生と連携し、絶滅危惧植物（ヒシモドキ、ムラサキ）の保護活動に努めた。

『自然環境に親しむ活動』



【いかだ下り】

【遺跡で泥釜づくり】

【窯出し】

【竪穴住居で土器展】

- 揖保川を約1.5kmいかだで下り、川遊びを満喫した。
- 弥生時代の国指定遺跡で、当時と同じ工法（泥釜）で土器焼きをし、地域の方に紹介した。

5. 活動の成果

入学以降、草木ゴミ置き場だと思っていた校舎西側の草木ゴミ置き場が、実は27年前の卒業記念の庭園だったことを知り、当時の方の願いに応えるため、積極的に復元・改良を誓った子どもたち。ただ復元・改良作業には、許諾や予算等の課題も多く、個々が知恵を出し合い、みんなで協力することが求められた。様々な方との出会いや支援もあり、一つ一つ課題をクリアしながら「いこいの広場」へと変えていく過程で、社会性を高められた。

また、人と自然との共生は、未来までつなぐことが重要であると認識し、自分にできることを考え、行動できた。来春入学するこども園の園児に自然の楽しさを伝えたり、高校生との交流から自然保護の大切さや継続観察のおもしろさに気付いたりしたことで、人や自然とのかかわりを深めることもできたと実感している。

6. おわりに

11月、視点を決め、パフォーマンス評価を行った。4月からの活動で身に付いた力を分析したところ、子どもたちは、右の資料にあるように、7つの力がついたと判断した。どの力も、これからの資質・能力との関係が深いことから、本単元のような学習活動が、重要であることがわかる。これからも、学校全体で子どもたちの資質・能力を育む学習づくりに取り組み、系統的な定着を図りたいと思う。

最後に、環境学習は、継続的な取組と系統的な取組が必要である。この活動を5年生に引き継ぎ、学校としての自然環境保全の心を養うとともに、1年生からの系統的な指導も行っていきたい。

活動を通して身に付いた力をふり返ろう

ふり返りの視点は、「自然とのかかわり」、「人とのかかわり」である。



「自然とのかかわり」の視点では、
「自然を大切にすること」
「命を大切に」
「研究する力」
また「人とのかかわり」の視点では、
「協力すること」
「相手の立場に立って考えること」
「感謝する気持ち」
「自ら伝える力」
が身に付いたと分析できた。

